

## 令和7年度修了式 講話要旨

### 年度末にあたって

令和7年度の修了式を迎えた。どんな1年だったか。一人一人振り返ってみてほしい。納得のいく1年だったか。足りなかったところがあるとすれば、来るべき新年度はどうしたいか。元日を祝って新年の決意を心に抱いてから、早くも3か月、4分の1年が経過しようとしている。自己点検をするよいタイミングだ。高校3年間は長いようで短い。もう1年経過した。もう2年経過した。ここで思いを新たに、そして思うだけでなく、思いを行動に移してほしい。

学校全体としては、活力に満ちた1年であったと思う。今月発行されたPTA広報紙「さかこう」第134号に今年度の部活動の目覚ましい活躍ぶりが掲載されている。運動部も文化部もすばらしい活躍だった。その質の高さに驚いている。つい先日の選抜高校野球開会式では、先ほど（国際高校生選抜書展 北関東地区優勝の）表彰をした書道部の皆さんが、同じ毎日新聞社主催ということもあり、校名を書いたプラカードが入場行進に使われた。平日の昼間なのでライブで放送を見ることはできなかったが、後からNHKの配信で見た。自分は何もしていないのに、誇らしい気持ちにならせてもらった。また、こうした脚光を浴びる華やかな舞台での活躍だけでなく、地域とのつながりを重視した活動の多さも目立つ。坂戸高校の大きな特色だと思う。

### かえるの由来

さて、部活動との関連で今日はかえるの話をする。

かえる広場のかえるの上に、柳の枝葉が描かれていることに気づいているだろうか。創立20周年を記念して整備された広場だが、年月とともに枝葉の部分がかなり薄れている。あれは、柳の枝に跳びつこうとするかえるの図柄だ。花札の絵柄にもなっている「柳に小野道風」の説話に因むものだ。

小野道風（おののとうふう・みちかぜ）という人は、「書の三蹟」の一人とされる書道のレジェンド。その説話とは、以下のような内容だ。

書道の才能に悩んでいた小野道風が柳の枝に跳びつこうと何度も挑戦する蛙の姿を見た。柳の枝が風にそよいだある瞬間に、蛙は枝に跳びつくことに成功した。小野道風は、その様子を見て、あきらめることなく、愚直に挑戦し続けることの大切さを学んだ。

坂戸高校には、この説話に因んだ愛称を持つ行事を、生徒たちが発案して実行した歴史がある。昭和63年に提案され、翌年、平成元年に実現した「文化部総合発表会」。その愛称

を「やなぎの下のかえる祭」といった。その当時、「やなぎ祭における文化部の存在感が低下している」という課題意識があったようで、大きなイベントを打って、文化部を盛り上げる起爆剤にしたいという意図があったらしい。校内だけの行事ではなく、外部にも広く周知して、坂戸市文化会館全館を使って、ステージ発表と展示を大々的に行った。ゲストスピーカーに、古舘伊知郎氏を招き、多くの一般来場者があったようだ。「文化部総合発表会」という正式名称は響きが堅いので、議論の末、「やなぎの下のかえる祭」という愛称がつけられた。ここには、「やなぎ祭」に対抗したり、その上をいこうとしたりするわけではないという意味合いと、柳に飛びつこうとするかえるの説話のように、愚直に向上心を持ち続けようという意味合いが込められている。そしてこれが、創立20周年を記念してかえる広場が整備されたことと符合する。平成2年3月発行の「飛翔」第13号に詳しい記事が載っている。略して「かえる祭」と呼ばれるようになったこの行事は、新歓行事として「お花見祭」（現在は「おはなみ祭」）が登場して、姿を消した。

今日の坂戸高校部活動の隆盛は、こうした先輩たちの、営々とした活動の歴史の上に築かれている。先日の卒業式で卒業生の累計は2万を超えた。重みある歴史だ。先輩たちは、柳の枝に飛びつこうとするかえるに自らの姿を仮託した。

かえる広場では、蛙の上の柳の枝葉にぜひ目を凝らしてみしてほしい。